

海外トピック

発展しつつあるアジアの フィランソロピー・セクター

—アジア・フィランソロピー・サミット 2014 に参加して—

日本財団
国際ネットワークチームリーダー

小林立明

1 アジア・フィランソロピー・サミット とは

10月20日から21日の2日間、シンガポールで開催されたアジア・フィランソロピー・サミット2014に参加した。今回のサミットは、2012年の第1回サミットを受けて開催された第2回大会である。主催団体はシンガポール・ナショナル・ボランティア&フィランソロピー・センター(NVPC)、米国グローバル・フィランソロピー・フォーラム、シンガポール・コミュニティ財団。中心的な役割を担っているNVPCは、1999年に設立された民間非営利団体で、「A Giving Nation」をビジョンとして掲げ、シンガポールにおけるボランティアとフィランソロピー活動の促進に取り組んでいる。会場は、伝統と格式を感じさせる旧議会ビル。サミットには、アジアのみならず、全世界からフィランソロピー関係者約200人が集まり、アジアにおけるフィランソロピーの将来について活発な議論を展開した。

なお、サミットには、協力団体として、米国のWINGS、英国のリソース・アライアンス、中国財団センター、米国のアジア・フィランソロピー・フォーラムなどの国際ネットワークも名を連ねており、グローバル・フィランソロピー・コミュニティがこのサミットに寄せる期待の大きさを感じさせた。

2 会議概要

今回サミットの総合テーマは、「Philanthropy

Unlimited」。「Unlimited」には、「限界がない」、「境界がない」、「制約がない」などの多様な意味が含まれており、国境、セクター、分野を超えてアジアのフィランソロピーを発展させていこうという主催者の意気込みが感じられた。会議全体のプログラムは別掲の通りだが、その中から幾つか印象に残ったセッションを紹介しておきたい。

イ 東南アジア諸国フィランソロピーの現状と課題

シンガポール経営大学のリエン・ソーシャル・イノベーション・センターは、インドネシア、フィリピン、シンガポール、タイの4カ国を対象に実施した「変革への方策：東南アジア諸国のフィランソロピー」という調査結果を全体セッションで報告した。この地域のフィランソロピーの事情について包括的に調査した資料はまだ少ないため、この報告は貴重なものである。

今回調査で明らかになった東南アジアのフィランソロピーの特徴は、大半が家族財団や個人寄付などインフォーマルなもので、専門助成財団はまだ少数である点である。このため、資金提供もコミュニティ・宗教・民族などの社会的関係に基づくものが多く、社会的課題解決のための戦略的なものはまだ少数であるという事実が明らかになった。背景には、資金の受け手となるNPOの事業基盤が弱い、中間支援団体が育っていない、フィランソロピーの促進に不可欠な税制優遇制度も整備されていない等の要因

が挙げられる。

調査結果を踏まえ、報告は、東南アジアのフィランソロピーの発展のためには、専門的な助成財団を整備し、戦略的フィランソロピーを定着させることが不可欠であるとした上で、この実現のために、①政府支援策の強化、②企業財団の設立促進、③税制改革、④さらなる動向調査、⑤ネットワーク形成、⑥透明性の確保などを提言している。東南アジア諸国は経済成長を続けており、域内の富の蓄積はフィランソロピー発展の好機となっている。また市民社会の成熟のためにもフィランソロピーの拡大は不可欠である。今後、提言に基づいてアジア各国がフィランソロピー発展により本腰を入れていくことを期待したい。

ロ ディアスポラ・フィランソロピー

ディアスポラ・フィランソロピーについてのセッションも興味深かった。「ディアスポラ」とは、元の国家や民族の居住地を離れて暮らす国民や民族の集団ないしコミュニティを指す。「ディアスポラ・フィランソロピー」とは、このようなディアスポラ・コミュニティが、元の国家や民族に対して、寄付金や助成金という形で資金を提供することを指す。たとえば、東日本大震災の際、海外の日系人コミュニティが義捐金や寄付金を集めて被災地支援を行った事例がディアスポラ・フィランソロピーということになるだろう。ディアスポラ・フィランソロピーは、欧米の研究者・実務家の注目を集めており、欧米では専門団体も登場している。

セッションでは、ディアスポラ・フィランソロピーの実践事例が報告された。たとえば、フィリピンのガワド・カリンガ・コミュニティ開発財団事務局長Jose Luis Oquinen氏は、設立時の資金調達額がわずか5万ペソのみだったのに対し、2012年には1億ペソ（＝約2.4億円）、2013年には5,800万ペソ（＝約1.4億円）に達したという実績を報告した。資金源の多くは、海

アジア・フィランソロピー・サミット プログラム

● 1 日目
開会挨拶
基調対話 ISIS財団創設者Ms. Audette Exel
総合プレゼンテーション 「変革の方策：東南アジア諸国のフィランソロピー」
全体セッション 「未来への窓：ネットワーク化されたフィランソロピー」
分科会1「バリア・フリーを目指すフィランソロピー」 1.透明性 2.協働 3.イノベーション
分科会2「バリアを超えるフィランソロピー」 1.ディアスポラ・フィランソロピー 2.ジェンダーに基づくアジアのフィランソロピー 3.企業によるコミュニティ投資の革新
● 2 日目
全体セッション 「2015年以降の国連持続可能な開発目標におけるアジアのフィランソロピーの役割」
基調対話 アヤラ・コーポレーション会長 Mr. Fernando Zobel de Ayala
分科会3「国境を超えた課題、枠にとらわれない解決」 1.老いと死 2.汚染されたアジア 3.人身売買ビジネス
全体セッション 「フィランソロピーと芸術」
全体セッション 「アジア・フィランソロピーの未来を構築する」
閉会挨拶

外在住のフィリピン人コミュニティで、災害時の緊急支援のみならず、フィリピンの社会的企業家支援やコミュニティ開発などに幅広く資金支援を行っているとのことである。このように、今後、アジアのフィランソロピーにおいて、ディアスポラ・フィランソロピーは重要な役割を果たすことが期待される。

ハ 「アジア財団センター」 構想

夕食会では、シンガポールを代表するリエン財団会長のローレンス・リエン氏が「アジア財団センター」構想を発表した。これは、アジア各国の主要なフィランソロピストや財団が中心となり、戦略的グラント・メイキング促進、協働、情報共有、ネットワーキング等を通じて、アジアの助成財団を強化していこうというもので、すでにフォード財団とシンガポール経済開発庁が関心を表明したとのことだった。構想が実現するまでには、紆余曲折があると思われるが、アジアの財団が、自らのイニシアチブでフィランソロピー・セクターを発展させていこうという提案をしたこと自体が大きな意味を持っていると思われる。今後、アジアにおける助成財団ネットワーク構築の動きは加速されていくだろう。

なお、構想には、日本の財団の参加も求められていた。今後、日本の助成財団セクターも、アジアとの関係をどのように構築していくのか、真剣に検討していく必要があると思われる。

3 所感

サミットでは、これ以外にも、様々な議論がなされており、アジアのフィランソロピー・セクターが確実に発展しつつあることを改めて認識した。セッションの合間のランチやコーヒー・ブレイクの際にも、そこかしこで情報交換やプロジェクトの提案などが行われており、この分野のダイナミックな発展を実感することができた。

他方、残念ながら、200人近い参加者中、日本の財団関係者は私を含めて2名しかいなかった。日本は、20世紀初頭以来、制度化された助成財団を運営してきた実績を有し、4,000を超える助成団体が活動している。「アジアのフィランソロピー大国」とも言える日本からのプレゼンスが低いのは本当に残念だった。

日本が、今後、ますますアジアとの結びつきを強め、アジアと共に生きていくことを望むのであれば、単に経済的な結びつきのみでなく、このようなフィランソロピー・セクター、あるいは市民社会における結びつきもさらに強化していく必要があるだろう。2016年に開催される予定の第3回アジア・フィランソロピー・サミットには、日本の財団セクターから多くの人たちが参加されることを期待したい。

